

二〇二四年度 入学試験問題

文学部 A 方式 I 日程・経営学部 A 方式 I 日程・人間環境学部 A 方式・
GIS (グローバル教養学部) A 方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。
- 四 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 五 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

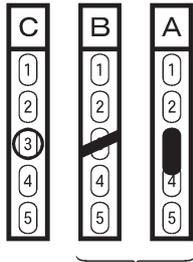
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

●文学部を志望する受験者は、問題(一)(二)(三)に解答せよ。

●経営学部・人間環境学部・GIS(グローバル教養学部)のいずれかを志望する受験者は、問題(一)(二)(三)(四)に解答せよ。

(一) つぎの文章は、『人工知能と人間・社会』という論集に収められた文章の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

たとえば部活帰りの男子高校生がドヤドヤと店に入ってきた瞬間に、店主が大量の揚げ物を準備しはじめる。たとえば毎朝立ち寄るコンビニのレジに近付いただけで、いつも決まって購入しているタバコのパッケージに店員が手を伸ばしている。分譲マンションのウェブサイトをいくつか興味本位で閲覧すればニュースサイトの脇に表示される広告がマンション一色に染まり、法哲学の専門書を何冊かネット書店で購入すれば「おすすめ」は関連分野の書籍で占められることになるだろう。

これらすべての背景にあるのはプロフィール——対象者の属性や過去の行動履歴から将来¹を予測し、先取り的にその需要に¹応えようとする¹ことである。プロフィールはそれ自体として人間行動の一般性——同じ属性を持つ人々は似たような選択をするし、個々人の趣味や志向には一貫性があつて同じような行為を繰り返す——に依存しており、その正確さは事前に入手されてきた情報の質と量とによって規定されることになるだろう。それぞれに異なる傾向性を持つような対象者を個別に把握し、行為者ごとの差異をも予測の基礎にし得るような「個別化」が有効性をさらに高めることは、言うまでもない。だからこそ、情報入手や経済活動の多くがインターネットを通じて行なわれることによって電子的な把握・集計の対象となり、さらに「モノのインターネット」(IoT: Internet of Things)によって社会の隅々に設置されたセンサー群を通じて捉えられた大量の情報がそれに加わることが展望される時代において、その有効性や効率性が大きく向上することが期待されると言うことができるだろう。多様な情報源から集められた情報が集積・相互集計されることによっていわゆる「ビッグデータ」^{*}が生まれ、その膨大な情報を効率的に分析するためにAI技術が活用されることによって、我々に提供されるさまざまなサービスの利便性・効率性が飛躍的に向上すること、^{*}個人化^{パーソナライズ}された快適な環境を期待できるようになる未来は、現実に見通されている。

たとえば私の趣味に合ったBGMをAIシステムに接続されたインテリジェント・スピーカーが自動的に選択し、曜日や時間など周囲の環境を考えて適切な音量で流し続けてくれるかもしれない。コンピュータのキーボードをタイプする速度から判断した作業の進行ペースや、さらには入力内容から推定される文章の内容も、その選択に活用することが出来るだろう。あるいは消費者が特定の製品を選ぶだろう量を的確に予測することによって、生産から流通に至るプロセスの徹底した効率化が社会的にも実現し得るかもしれない。

だが同時に、その技術が有力であればあるほど、その副作用や負の側面も懸念されることになるだろう。憲法学の観点からビッグデータとプロファイリングに潜み得る問題を考察し、この分野をリードする研究者と呼んでいいだろう山本龍彦は、近著においてその問題を以下の三点に要領よく整理している。

第一に、個人が属性の束へと還元され、全体性・統一性(integrity)を失う点。たしかにプロファイリングによって「我々一人ひとりの個性や特徴が重視されるという点」は憲法上の重要な理念である個人の尊重(憲法13条)に一致しているように見える。しかし実際に分析の対象となっているのは個人が持つと想定されている属性(たとえば「男子高校生」)であり、その属性を帯びていると想定されている個人やその人格そのものではない。それどころか、属性の集合として理解されることを通じて個人々は「複数の属性に基づきAIがグルーピングした「セグメント」^{*}によって自動的に類型化(categorize)され、個人として(as individuals)尊重されることはなくなる」だろう。平野啓一郎や鈴木健によつてつとに指摘されているように、個人(individual)とは分割不能(in-dividual)なものの謂であるという点を、我々は想起してもいいはずだ。国家、共同体、氏族集団……といったものの一体性・均質性が無前提に想定されていた時代に、その内部の人々が現実には持つ多様性や差異を指摘することによって成立したのが、現代社会と憲法体制の基礎にある個人主義であった。「すべて国民は、個人として尊重され」(憲法13条)、「法の下に平等であつて、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的、又は社会的関係において、差別されない」(同14条)とは、集団の一員であることから一定の性質を帯びているはずだと決め付けられるようなことなく、一人の固有の個人として扱われるべきことを意味していたのではなかっただろうか。だとすれば、私がたまたま持つ

ている属性(男子高校生)のみに注目し、その属性を帯びた集団の一人として私の性格を勝手に推定しようとするプロフィールは、必然的にこのような個人の尊重に反することになるのではないか、たとえば「黒人だから貧乏に違いない」と決め付けるような古典的な差別とどれだけ違うものなのかということになるだろう。

しかも、我々が希望や選好を明示的・顕在的に表明することによって市場全体や個々のサービス提供者が応答するのではなく、我々が持つだろう欲望を彼らが予測し、先取りし、あらかじめ提供する状況が生じれば、そのなかで我々は「先回りされる個人」へと変貌していくことになるし、それが本当の私あるいは現実の自分の希望に合致しているかには、常に一定の不透明さがつきまとうことになる。

第二に、AIの判断過程やその理由が不透明になることによって、それに対応した個人の自己決定的な対応が困難になると。「AIの「意思決定」過程が開示されず、

X

化することになれば、本人は何が自己の能力や信用力に関する評価

の基礎にされるのかわからず、将来の行動計画を練り上げることができなくなるため、自律的・主体的に自らの人生を歩んでいくことが難しくなる」だろう。我々が一定の判断の対象となるにもかかわらず、その理由や根拠が一切示されないという状況——そこから、完全に不透明な状況のなかで進められる裁判を通じて処刑という運命に至る男ヨーゼフ・Kを描いたフランク・カフカの小説『審判』を思い浮かべる人も多いことだろう。成原慧によればプロフィールをめぐる懸念の背景にあるのは、そのような意味でカフカの「不合理的な³」のである。

第三に、プロフィールの精度を上げるために材料とするデータの範囲を拡大していくことが、他のさまざまな憲法上の価値と衝突すること。まずそれが、秘密とか自己情報コントロールとの関係で観念されるプライバシーと直接的に衝突し得ることは、たやすく見て取ることができるだろう。この問題を個々人の同意によって解決しようとした場合、たとえば一定の健康不安を抱える人が身体情報の提供・利用を拒否することによってデータに占める割合が実際よりも大きく低下し、それを基礎として行なわれる社会的決定において無視されてしまうことになるかもしれない(過少代表)。あるいは生命保険の加入審査

において遺伝情報が活用される場面を考えれば、それが両親に由来するものであって本人に帰責できない以上、自己責任原則がおびやかされることになる。

さらに本人に関するものであっても「過去の過ちを永遠にデータ上に記憶させ、評価の基礎として使い続けることは、我が国の最高裁がいう「更生を妨げられない権利」を侵害しうる」⁴。それはたとえば前歴者に消えることのない刻印、「データ・ステイグマ」を負わせるものになりかねない。罪人であることを示す「現代の「＊ひ緋文字」」は、データファイルのなかに刻印され、他者からは見えないが、その人の人生を一生コントロールすることになる」というわけだ。

だがこのような懸念は、どこまで、どの範囲で正当なものなのだろうか。冒頭にその例を挙げたように、素朴なプロファイリングはこれまでも日常的に行なわれてきた行為であるにすぎない。扱われるデータの量とそれを処理する計算能力が量的に（たしかに爆発的⁵ではあるかもしれないが）増加したことが、どのような本質的変化へとどのように結び付くのだろうか。

山本龍彦は、古典的な⁵プロファイリングと現代的なものの差異を①利用されるデータ量、②処理の自動性、③科学的な信憑性^{しんぴやう}、④予見困難性（結果の意外さ）、⑤判定される項目が広汎かつ詳細であること、の5点に整理している。ここで特に注目しているのは（そして山本自身によっても強調されているのは）③科学的信憑性、特にそれが現実的に科学的か・どれだけ正しいかとは別の問題として信頼されてしまうことの問題性である——「科学的信憑性の高さゆえに、確率的判断に過ぎないプロファイリング結果（対象者の虚像）と対象者そのもの（実像）とのギャップ（余剰）を縮減させることがある」。その結果、示された判断は訂正が困難な、あたかも誤解の余地がないものであるかのように信じられてしまうだろう——それが本当に事実を示しているとは限らないにもかかわらず。このような^{えんげん}真実性のよそおいこそが現代の問題の淵源^{えんげん}なのだということになるだろうか。

（大屋雄裕「プロファイリング・理由・人格」より）

【注】

*ビッグデータ インターネット上で日々収集・蓄積される多種多量のデータ。

*AI 人工知能。学習・推論・判断など、人間の知能が持つ機能を備えたコンピュータ・システム。

*セグメント 区分。区別。

*緋文字 アメリカの作家ナサニエル・ホーソーン(一八〇四―一八六四)の小説『緋文字』において、主人公は、罪を犯したしるしとして、胸の部分に、緋色(赤色)の文字を付けさせられる。

問一 傍線部1「先取りのにその需要に応えようとする」の具体例として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 部活帰りの男子高校生たちが店に入ると、店主が大量の揚げ物を準備しはじめる。

イ 客が、毎朝立ち寄るコンビニに入り、いつも決まって購入しているタバコを注文する。

ウ 分譲マンションのウェブサイトをいくつか興味本位で閲覧する。

エ サイトの脇が広告で占められたネット書店で、法哲学の専門書を購入する。

オ AIシステムが、キーボードがタイプされた速度をもとに、作業の進行ペースを記録する。

問五 傍線部4「更生」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア それまでの感情的・攻撃的な言動を反省し、理性的な人間になること。
- イ 社会的・精神的に好ましくない状態から、問題のない状態に立ち直ること。
- ウ 氏名・住所・身分を新しいものに変えて、過去の自分を捨てること。
- エ 社会の発展に尽くしたり、危機を乗り切ったりすること。
- オ 健康で文化的な暮らしができるように、生活の基盤を整えること。

問六 傍線部5「古典的なプロファイリングと現代的なものとの差異」とあるが、現代的なプロファイリングにはどのような問題

点があると述べられているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 扱われるデータの量とそれを処理する計算能力が爆発的に増加したことによって、本質的な変化が起きている点。
- イ データファイルの中に罪を犯した人の過ちを記録し、他の人々がそれを評価の基準として使い続けることになる点。
- ウ 科学的な信憑性と予見の困難性ゆえに、プロファイリング判断が本当に正しいのかどうかわからなくなっている点。
- エ プロファイリング結果は確率的判断に過ぎないのに、誤解の余地がないものであるかのように信じられてしまう点。
- オ プロファイリングされた対象者の実像と虚像との差異が縮減し、真実性を装わなくてはならなくなってしまう点。

問七 本文の内容に**合致しないもの**をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア プロファイリングは、個々人の志向には一貫性があつて同様の行為を繰り返すという、人間行動の一般性に依存して行なわれている。

イ 多様な情報源から集められたビッグデータをAI技術が分析することによって、サービスの利便性が向上し、快適な環境が提供されるだろう。

ウ 我々が持つだろう欲望をAIが予測し先回りして提供するようになると、現実の個人と先回りされた個人とが限りなく一体化してゆく。

エ AIが判断をするときその理由や根拠は一切示されないため、我々はそれに対応して自律的・主体的な選択をしてゆくことが困難になる。

オ 健康不安を抱える人が身体情報の提供を拒否すると、データに占めるその割合が低下し、社会的な決定を行なうさいに考慮されないおそれがある。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

七条の南、室町の東一町は、祭主三位輔親すけちかが家なり。丹後の天の橋立をまねびて、池の中島をはるかにさし出して、小松をながく植ゑなどしたりけり。寢殿ひだりの南の廂ひだりをば、月の光入れむとて、さざざりけり。

春のはじめ、軒近き梅が枝に、鶯うぐひすのさだまりて、巳Xの時ばかり来て鳴きけるを、ありがたく思ひて、それを愛するほかのことなかりけり。時の歌よみどもに、「かかることこそ侍れ」と告げめぐらして、「明日の辰Yの時ばかりに渡りて、聞かせ給へ」と、ふれまはして、伊勢武者の宿直してありけるに、「かかることのあるぞ。人々渡りて、聞かむずるに、あなかしこ、鶯うちなんどして、やるな」といひければ、この男、「なじかは遣はし候はむ」といふ。¹ 輔親、「とく夜の明けよかし」と待ち明かして、いつしか起きて、寢殿みなおもての南面をとりしつらひて、営Aみるたり。

辰の時ばかりに、時の歌よみども集まり来て、いまや鶯鳴くと、うめきすめきしあひたるに、² さざざきは巳の時ばかり、必ず鳴くが、午の刻の下がりまで見えねば、「いかならむ」と思ひて、^B この男を呼びて、「いかに、鶯のまだ見えぬは。今朝はいまだ来ざりつるか」と問へば、「鶯のやつは、さざざきよりもとく参りて侍りつるを、帰りげに候ひつるあひだ、召しとどめて」といふ。「召しとどむとは、いかん」と問へば、「取りて参らむ」とて立ちぬ。

「心も得ぬことかな」と思ふほどに、木の枝に鶯を結びつけて、持て来たれり。^C おほかたあさましともいふはかりなし。「こは、いかにかくはしたるぞ」と問へば、「昨日の仰せに、鶯やるなど候ひしかば、いふかひなく逃し候ひなば、弓箭ゆみやとる身に心^D 憂くて、神頭しんどうを上げて、射落して侍り」と申しければ、輔親も居集まれる人々も、あさましと思ひて、この男の顔を見れば、⁴ 脇わきかいとりて、いきまへ、ひざまづきたり。祭主、「とく立ちね」といひけり。人々をかしかりけれども、この男の気色におそれて、え笑はず。一人立ち、二人立ちて、みな帰りにけり。^E

興きょうさむるなどは、こともおろかなり。

〔『十訓抄』より〕

【注】 *祭主三位輔親 平安時代の歌人、大中臣輔親。伊勢神宮祭主。

*廂 寢殿造で、母屋の外側の部屋。

*伊勢武者 伊勢国(現在の三重県)出身の武士。

*南面 南に向いた部屋。

*神頭をはげて 「神頭」は矢じりの一種、「はげて」は矢をつがえて。

問一 点線部X「巳」の時ばかり「Y」辰の時ばかり」は現代の何時頃にあたるか。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 午前二時頃 イ 午前四時頃 ウ 午前六時頃 エ 午前八時頃 オ 午前十時頃

問二 傍線部1「なじかは遣はし候はむ」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア どうして鶯に使いの者を送ったりいたしましょうか。

イ どうして鶯を遠くに行かせないようにするのでしょうか。

ウ どうして鶯を遠くに行かせたりしましょうか。

エ どうして歌よみたちに鶯の声を聞かせたりするのでしょうか。

オ どうして私を使者として遣わしたりするのでしょうか。

問三 二重傍線部A「あ」B「ね」C「り」D「な」E「に」の中に一つだけ他と品詞の異なるものがある。それをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

A あ B ね C り D な E に

問四 傍線部2「うめきすめきしあひたる」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 時が経つのも忘れて大声で騒いでいた

イ 疑問を感じつつひそかに噂し合っていた

ウ 期待しながら楽しみに待っていた

エ 詩歌を作るのにみな苦心していた

オ しびれを切らして文句を言っていた

問五 傍線部3「あさまし」とあるが、ここでの意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 度を越していて軽蔑する。

イ 意外なことに驚きあきれる。

ウ 常識を逸脱すること甚だしい。

エ 自分の責任を認めず見苦しい。

オ 期待を裏切られてみじめである。

問六 傍線部4「この男の顔を見れば、脇かいとりて、いきまへ、ひざまづきたり」には、「男」のどのような気持ちが表れているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 主人の命令を忠実に果たし得意げになってかしまっている。

イ 主人の意に反してしまったことにはじめて気づき困惑している。

ウ 周囲の人々がうるたえているのにその理由が分からず憤慨している。

エ 自分がしたことが思わぬ結果をもたらしたことを反省している。

オ 主人の意向が理解できずどうしてよいか分からずにあわてている。

問七 右の文章において「輔親」はどのような人物として描かれているか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 自分の生活環境を整えようとするには細やかな心遣いをするが、風流を理解しない人に対しては激しい怒りを感じて許すことができない。

イ 使用人や友人たちへの心配りには欠けるところがあるが、自分の理想を実現するためには細心の注意を払うことを周囲の人々に求めている。

ウ 自分の求める理想がすでに過去のものになっていることに気づかず、時代の変化に背を向けてひたすらその理想を追い求めている。

エ 自分がよいと思っていることにはこだわりをもって打ち込むが、その自分の価値観を客観的な視点から捉える姿勢には欠けている。

オ 周囲の人々が追求している風流な心に共感し、その人々の理想を実現するためには手間暇を惜しまずに日ごろから努力を重ねている。

問八 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 輔親の屋敷には春になるといつも鶯が来て美しく鳴いていた。

イ 輔親は鶯を客に披露するのが待ち遠しくて眠ることができず一晩中起きていた。

ウ 輔親は鶯が屋敷の中にも入れるように寢殿の格子戸をあけていた。

エ 輔親は鶯が池の中島の小松に留まれるようにあらかじめ準備をしていた。

オ 輔親は従者の武者が鶯を捕まえて木の枝に縛っていたのを見て泣き悲しんだ。

●つぎの問題〔三〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

呉^{*} 範^{*} 字^{*} 文^{*} 則^{*}、会^{*} 稽^{*} 上^{*} 虞^{*} 人^{*} 也^{*}。 （中略）

範^a 為^a 人^a 剛^a 直^a、頗^a 好^a 自^a 称^a、然^a 与^a 二^a 親^a 故^a 交^a 接^a 有^a 二^a 終^a 始^a。

素^b 与^b 二^b 魏^b 滕^b 同^b 邑^b 相^b 善^b。滕^c 嘗^c 有^c 二^c 罪^c、権^c 責^c 怒^c 甚^c 嚴^c、敢^c

有^c 二^c 諫^c 者^c 死^c。範^c 謂^c 滕^c 曰^c、与^c 汝^c 偕^c 死^c。滕^c 曰^c、死^c 而^c 無^c 益^c、何^c

用^d 死^d 為^d 範^d 曰^d、安^d 能^d 慮^d 此^d、坐^d 觀^d 汝^d 邪^d。乃^d 髡^d 頭^d 自^d 縛^d

詣^e 門^e 下^e、使^e 二^e 鈴^e 下^e 以^e 聞^e。鈴^e 下^e 不^e 敢^e、曰^e、必^e 死^e、不^e 敢^e 白^e 範^e

曰^f、汝^f 有^f 子^f 邪^f。曰^f、有^f。曰^f、使^f 汝^f 為^f 吳^f 範^f 死^f、子^f 以^f 属^f 我^f。鈴

下^g 曰^g、諾^g。乃^g 排^g 閣^g 入^g。言^g 未^g 卒^g、権^g 大^g 怒^g、欲^g 二^g 便^g 投^g 以^g 戟^g、

逡巡^{シテ}走出^リ。範因^{リテ}突入^シ、叩頭^シ流血、言与涕並^ニ。良久^ヤ、權^ノ
 意^ヲ積^{トケ}、乃^チ免^{ユル}滕^ヲ。滕見^テ範謝^{シテ}曰^{ハク}、父母能^ク生^コ長^{スレドモ}我^ヲ、不^レ能^ハ免^{レシムルコト}
 我^ヲ於^テ死^ス。丈夫^{ヨリ}相知^{ルコト}、如^{キニ}汝^ノ足^{レリ}矣^ニ、何^レ用^フ多^ク為^ル。

(『三国志』より)

【注】

- * 呉範 三国、呉の人。
- * 会稽上虞 会稽郡上虞県。
- * 自称 おのれを誇る。
- * 魏滕 三国、呉の人。
- * 權 孫權。呉の建国者。
- * 髡頭 罪人のしるしとして頭の毛を剃る。
- * 門下 宮門のもと。
- * 鈴下 主君に取り次ぎをする役人。
- * 排閣 宮中の小門を押し開く。
- * 戟 兵器のほこ。

問一 波線部 a「為人」b「素」c「嘗」d「安」の読み方として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

a 為人

ア ひとをなす

イ ひととして

ウ ひとのため

エ ひととなり

オ ひとごとに

b 素

ア はじめ

イ それ

ウ もとより

エ しばらく

オ つねに

c 嘗

ア けだし

イ たちまち

ウ おのづから

エ かつて

オ むしろ

d 安

ア いづくんぞ

イ あに

ウ いくばくか

エ いづくにか

オ やすんじて

問二 二重傍線部 X「必死」Y「排闥入」の動作の主体は誰か。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。なお、同じ記号をくり返し選んでもよい。

ア 呉範

イ 魏滕

ウ 孫権

エ 鈴下

オ 父母

問三 傍線部1「使汝為呉範死」の読み方として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 汝と呉範の為に死せしむれば
- イ 汝をして呉範の死を為さしむれば
- ウ 汝を呉範と為して死せしむれば
- エ 汝と呉範の死を為さしむれば
- オ 汝をして呉範の為に死せしむれば

問四 傍線部2「叩頭流血、言与涕並」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 戟で頭を叩かれて血を流し、涙で言葉が途絶えがちになった。
- イ 頭を床に打ちつけて血を流し、涙ながらに意見を述べた。
- ウ 地面に頭をこすりつけて血を流し、涙をこらえて弁解した。
- エ こぶしで頭を叩いて血を流し、口角泡を飛ばして説得した。
- オ 相手の頭を殴って流血させ、涙をこぼして怒りの言葉を吐いた。

問五 傍線部3「丈夫」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 屈強な体
- イ 同郷の友
- ウ 不屈の精神
- エ 連れ合い
- オ 一人前の男

問六 傍線部4「何用多為」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア あなたには何度も死ぬべき命を助けられた。

イ 多数の友人を持ったとて益もないことだ。

ウ 何度も人を募ったが、該当者はいなかった。

エ 多くの友人を巻き添えにしたりはしなかった。

オ 多くの困難に直面したが、信念を曲げなかった。

問七 本文の内容に合致するものをつぎの中から二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 呉範は取り次ぎの役人の子をわが子として引き取り、成人するまで面倒をみた。

イ 魏滕は信義を重んずる人物であり、一国を背負って立つ国士の風があった。

ウ 呉範は友人の魏滕を救うために自分の命をかえりみずに孫権に助命を請うた。

エ 孫権は魏滕が秘術を惜しみ隠していることを理由に処罰しようとした。

オ 呉範は親しい者たちとは終始変わることはない篤い^{あつ}交わりを保った。

●つぎの問題〔四〕は、経営学部・人間環境学部・G・I・S(グローバル教養学部)のいずれかを志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕 つぎの文章Ⅰは、日本民俗学の祖で農村を重視した柳田国男(やなぎたくに お)(一八七五—一九六二)の考えと、一九八〇年代に大平正芳首相(おほひらまさよし)(当時)の主導による政策研究会が発表した「田園都市構想」とを比較した論考の一部である。これを補う文章Ⅱ柳田国男「先祖の話」の「解説」と併せて読んで、あとの問いに答えよ。

文章Ⅰ

柳田が『家族基盤の充実』^{*}を読んで不満を覚えるとするれば、おそらく、その最大のもは、家族を論じながらそれが死生観にまで深く高められていないということだろう。「家族」と「死生観」のあまりのギャップに戸惑う読者もいるだろうが、それが、ゴッドやアラーを持たない日本人の信仰——柳田のいわゆる「固有信仰」——のエッセンスなのだ。さらに、柳田宗教学を筆者なりに拡張解釈すれば、親しみのある人と人、親しみのある人と世界との「つながり」のなかに、自分一個の生命を超えた「永遠の生命」を見ようとするのが「家の宗教」¹なのである。

『家族基盤の充実』の執筆者が「家の宗教」に無知だったと思われない。というのは、その報告書には次のような記述があるからである。

「各個人、各家庭にはそれぞれ寿命があるが、有限の個体の生命や各家庭の寿命を超えて、生命の流れは継続し、家庭の歴史と文化は伝承されていく。」

しかし、惜しむらくは、この点に関する記述は、この引用文も含めて六行ほどに限られ、宗教的含意が掘り下げられることがなかった。もちろん柳田への言及もない。

「有限の個体の生命や各家庭の寿命を超えて継続する生命の流れ」を柳田は「家」と呼んだのだが、この「家」を、通常の意味での家族や先祖や子孫に限らず、「私」に親しみのある、過去から未来に渡るすべての人やモノの集合体と考えてもよいのではな

いか、とまで筆者は考える。「私」はそれら親しみのあるものとともに永遠に生きる。

それというのも、「私」の人生＝生命が、父や母、息子や娘、教師や学生、友人たち、故郷の山や川や高速道路やマンホールの蓋と決して切り離せないことからわかるように、親しみのあるものは「私」の生命の一部だからだ。そして、「私」が死んでも、この人は生きて、「私」が死んだあの人を想い出すように、「私」を想い出す。やがて生まれてくる新しい人も、「私」に親しい世界の一部を継承する限り、親しみのある人なのだ。あそこにああして見える風景も「私」などには無頓着に存在し続けてきたし、存在し続けるだろう。それらの人や世界が「私」に親しみがある限り、「私」の生命の一部と感ぜられる限り、「私」はそれらとの「つながり」のなかで「永遠」に生き続ける。

「永遠に生きる」者に時間はない。「過去」↓「現在」↓「未来」と一方的に流れる時間、過ぎ去って取り戻せない「過去」と、不確実で未知の「未来」と、その狭間の X にのみ存在する「現在」からなる、近代人が慣れ親しんだ「時間」、近・現代に支配的な「進歩的時間意識」というものはない。

逆にいえば、「現在」のなかに「永遠」があるともいえる。というのは、「永遠に生きる」者の「現在」は「過ぎ去らず」、来るべき「未来」も未知ではなく「既知」なのだから、彼らはどの「現在」においても「常なるもの」を実感できるからである。もちろん外形その他はめまぐるしく変わるが、「永遠に生きる」者は、それら「流行」のなかに「不エキ」を見る。

筆者の見るところ、柳田は、「家の宗教」の研究を通じて、こうした時間意識——カール・マンハイムがいうところの「保守的時間意識」——に到達している。宗教論や時間論を報告書に期待するのは無理だろうが、本書冒頭に述べたように、田辺元の「永遠の今」という言葉を座右のメイとしていた大平には、柳田の時間意識・宗教意識を即座に理解できたに違いない。

このような古風な時間意識を持つ者、それが真実の時間であると考える者にとって、「噴火口上の舞踏」を踊る現代都市の文化、現代都市の時間意識ほど空しく愚かに見えるものはない。「革新」や「イノベーション」の名の下に次々と現れ、現れては消えるバブルのような新意匠は、人びとの時間感覚を狂わせ、束の間の快楽と裏腹の疲労感と空虚感しか残さない。都会人は皆、自分たちが巨大な空虚、じっとしているとたちまちそのなかに引き込まれてゆくブラックホールの上で空しく踊っていること

を知っているのだ。

なぜ踊るのか。とりあえずの理由は、現代都市の随所で展開される猛烈な競争、たとえば販売競争によって、静止している者、停滞している者が敗者の地獄に引きずり落とされるからだ、そのさらに奥底には、敗者にも勝者にも待ち構えている死に対する現代人の不安と恐怖がある。死が不安で恐ろしいから、それを忘れるために猛烈に活動し舞踏する——それが現代人の象徴としての都会人の「救い」なのだ。そして、その「救い」がさらに現代人を窮地に追い込んでゆく。「救い」があっても死は必ず訪れる一方で、彼らが、死と直面し死を受容する術、先祖伝来の知恵^{すべ}、死生観を忘れてしまったからである。

しかし、「幸い」なことに、彼らの不安と恐怖を和らげ、足下の空虚をかりそめに埋めるものが次々と現れる。猛烈な活動自体がその一つなのだが、現代に新宗教、新々宗教に事欠くことはない。かつてのマルクス主義なども「知識人の阿片」、すなわちある種の世俗宗教だったのだが、現代により普遍的な疑似宗教としては、「科学技術信仰」を挙げるべきだろう。実際、一九世紀フランスの進歩主義者コンドルセは、科学技術と医療の発展の先に「不老不死」の世界を待望したのだが、それが夢想、幻想に過ぎないことは、本人も白面の時は承知していた。

問題なのは、「親しいものとのつながり」の感覚が失われることだ。猛烈な競争は人と人の「つながり」を破壊し、彼らにますますエゴイストになることを余儀なくさせるばかりでなく、「創造的破壊」は「現在」と連結すべき「過去」を破壊し、まったく予見できない「未来」を暴力的に「現在」へと持ち込み、「過去」と「現在」と「未来」を分離する。時間の流れは分断され、「現在」は「永遠の今」ならぬ「X」となり、各人は「昨日の自分」と「今日の自分」と「明日の自分」の「つながり」を絶たれて、アイデンティティの危機に陥る——「自分は一体何者なのか？」と。

時間の流れが分断され、「昨日」と「今日」と「明日」のつながりがなくなれば、それらをまとめた「物語」を語ることもできなくなる。「物語」あるいは「歴史」とは時間のつながりと脈絡があつて可能となるからだ。マッキンタイア^{*}の人間の本質は「物語を語る動物(story-telling animal)」である⁵という説が正しければ、これは、現代人が人間でなくなりつつあることを意味している。

(佐藤光『よみがえる田園都市国家——大平正芳、E・ハワード、柳田国男の構想』より)

【注】 *『家族基盤の充実』 大平正芳首相(当時)の政策研究会報告書3(家族基盤充実研究グループ、一九八〇年)。

*カール・マンハイム ハンガリー出身の社会学者(一八九三―一九四七)。

*田辺元 哲学者(一八八五―一九六二)。

*「噴火口上の舞踏」 柳田国男の著作にみえる、都市生活者の様子の形容。

*マッキンタイア スコットランド出身の哲学者(一九二九―)。

文章Ⅱ

柳田にとつての神と靈魂という二つの大問題は、結局この家をめぐる問題意識をなかだちとして結びついていったものと思われる。

『先祖の話』は家と先祖の問題から説きおこされ、農村から都市へと出ていく者たちが多くなってきた世相の中で、家の崩壊への強い危機感を表明しながら結ばれている。

人は死ねば子や孫たちの供養や祀りをうけてやがて祖靈へとシヨウ華し、故郷の村里をのぞむ山の高みに宿って子や孫たちの家の繁盛を見守り、盆や正月など時をかぎつてはその家に招かれて食事をともにし交流しあう存在となる。生と死の二つの世界の往来は比較的自由であり、季節を定めて去来する正月の神や田の神なども実はみんな子や孫の幸福を願う祖靈であった。これが、『先祖の話』の中で柳田が日本人古来の靈魂観・死生観として日本の民俗伝承をもとに抽出した結論であり、そこには神と靈魂、そして先祖と家とのみことな連結がみられる。

(新谷尚紀「解説」『柳田国男全集13』より)

問一 波線部A「不エキ」B「座右のメイ」C「シヨウ華」のカタカナ部分の漢字表記について、傍線部に同じ漢字があてはまるものをつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A 不エキ

ア 利エキの一部を寄付する。

イ 演エキ法と帰納法。

ウ エキ者に占ってもらう。

エ 堤防作りに使エキされる。

B 座右のメイ

ア 堅いメイ約を結ぶ。

イ メイ菓を土産にする。

ウ 本質的なメイ題を設定する。

エ もってメイすべし。

C シヨウ華

ア 課長にシヨウ進する。

イ 世界中からシヨウ賛される。

ウ 表シヨウ状をもらう。

エ 大鷲^{わし}が天を飛シヨウする。

問二 傍線部1「家の宗教」に関する説明として、**文章Ⅰ・文章Ⅱ**の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 「家」は、人が死後に先祖となり、いつでも自由に子孫を訪問できる蘇生の場として、農村にのみ存在した。

イ 「家」は、人が死後に供養を受けてやがて祖霊となり、この世の子孫と交流するという死生観の形成基盤となった。

ウ 「家」は、文化の伝承が乏しい都市ではなく、やおよぶ八百万の神々が宿る大自然に抱かれた農村で永続することができた。

エ 「家」は、個人がこの世で無限の寿命を得られるという霊魂信仰を育む、家族の代々の聖なる学び舎であった。

オ 「家」は、盆や正月に子孫が故人を迎えて、祖霊の状態から唯一神へと地位を高める装置の役割を担っていた。

問三 傍線部2「故郷の山や川や高速道路やマンホールの蓋」も「私」の生命の一部であると言えるのはなぜか。その説明として**適切ではないもの**をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 死後にあの世から定期的にこの世に迎えられる時に、思い出深い風景が残っていると、この世で生きた時間とのつながりを感じることができるから。

イ あらゆるものに霊魂（＝不可視の生命力の源）が宿り、交流すると感じる心性によって、自分のいのちは自分を取りまく自然やモノともつながっていると考えるから。

ウ 故郷の風景は、そこで子供時代に親しい交わりを持った家族や友人等との人間関係と結びついて、喜怒哀楽がなつかしく思い出されるから。

エ 現在とつながる持続可能な未来のためには、人々が暮らす豊かな自然環境が不可欠であり、いつまでも変わらぬ田舎の風景が大切だから。

オ この世での生を終えるときに、自分の人生のかけがえのない思い出として、故郷の風景も自分のアイデンティティと切り離せないから。

問四 空欄 X に共通して入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 僥倖やうしやう イ 虚無 ウ 刹那せつな エ 範疇はんちゆう オ 夢幻

問五 傍線部3「現在」のなかに「永遠」がある」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 現在に生きる人々には、過去のできごとからの学びを通して自分たちの歩みを反省し、より進歩的で幸福な未来を予測できる経験値が豊かである。

イ 現在に生きる人々は、過去も未来も姿・形の変わらないものを見定めて尊び、信仰することによって、自分という個体の不老不死を実感することができる。

ウ 現在は過去・未来と別個の一点ではなく、過去と親しくつながり、未来にも大事なものが安定して存続することを予測できる、豊かなつながりを持った時間である。

エ 現在・過去・未来は直線的時間意識のなかで一瞬の「点」であるが、だからこそ人々は現在をかけがえのない一点として大事に生きようとする気持ちに導かれる。

オ 生物としての一個の人間には命の終わり(死)があるが、新宗教はそれを超越して、永遠に生きる集団的な意思を生むことを可能にする。

問六 傍線部4「噴火口上の舞踏」を踊る現代都市の文化、現代都市の時間意識ほど空しく愚かに見えるものはない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 絶えず競争し続ける焦燥感とともに、現在の自分の時間が過去・未来の時間と分断されているため、孤独な死の恐怖にさらされて生きねばならないから。

イ 市場経済のなかで激しい生存競争に取り残されないようにと闘い続けるために、安らぎのひと時がなく、時間が非常に早く過ぎ去っていくから。

ウ 過労により健康を損ない、かりそめの疑似宗教・新興宗教にすがって死の恐怖をかるうじて紛らすような不安を抱えて生きねばならないから。

エ 自然と寄り添う暮らしで育まれる、豊かに季節が循環するという感覚を忘れて、無機質な都市環境で暮らすうちに、人間らしい感性を失ってしまうから。

オ 勝ち組と負け組とがはっきり分かれる競争社会のなかで、信義や互助の心を軽んじるようになり、いつしか人間不信のエゴイストになってしまうから。

問七 傍線部5「現代人が人間でなくなりつつある」とあるが、「人間」に必要なのはどのようなことだと筆者は述べているか。三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

(下書き用)

40 30